

<書評>

主体の可能性としてのクリエイティビティ

Smadar Lavie, Kilin Narayan and Renato Rozaldo(eds.),
Creativity/Anthropology. (Cornell University Press, 1993)

坂 部 晶 子

1 「クリエイティビティ」の定義

この論文集のタイトルである「クリエイティビティ」は、卓越した芸術家のクリエイティビティなどとふだんいわれるときの用法とは違っている。ここで取り上げられるクリエイティブな人物とは、特別に強烈な独創性の持ち主や卓抜した才能のある人だけでなく、「ある文化を内部から変換することができる」人物をさす。「文化」とは、一束の習慣と言い換えてもいいかもしれない。私たちはふだんあまり意識することもなく、その場所ですべて以前から行われてきた習慣ののっとなって暮らしている。この論文集のなかで、クリエイティビティとは、このような習慣を「ある共同体やその構成員のいく人かが価値があるとおもう、そういうような仕方に変えていく、人間の活動」としてとらえられている。

このようなクリエイティビティの定義に意味があるとおもわれるのは、この定義にしたがえば、次のように考えられるからである。私たちは普段なにげなくその場所で以前から行われてきた習慣や行動の規則を身につけている。それは、そのような習慣や規則にしたがうことで、はじめて、その社会の中で意味に他の人々になにかを伝えたり、働きかけたりすることができ、また他の人々からなにかを受け取ったり、働きかけられたりできるからである。たとえば、私たちは道で知り合いにあった時にすこし首を傾げることで、相手に気づいているという挨拶を伝え、その意味を受け取ることができる。しかし、習慣は、それをとおして他の人たちとコミュニケーションを可能にするという側面のほかに、規範的で拘束的な側面をもっている。それは、守られなくてはならないものとして、私たちの前にある力をもって現れてくるのである。ふだんはあまり意識されることはないが、私たちの生活は数多くの規範に取り囲まれている。習慣の規範的な側面を強調して社会を考えると、それはすでに確立された構造をもつものとして見える。このような社会の見方を静

的な社会観と呼ぶとすれば、クリエイティビティを内部から習慣を変えていく人間の主体的活動としてみるこの論文集の定義の背後にあるのは、動的な社会観といえる。この社会観では、社会や文化から個人にむけて触覚のようにはりめぐらされる習慣という名の拘束に対して、その一本一本を切断することなくはずして、最後には社会や文化の変換を導く可能性をもつものとして個人は語られることになる。

社会を変えていくクリエイティビティの発露を人間の主体的行為そのもののなかに見るという視点は、社会を個々の人間の相互作用によって成り立つものとしてみるというシンボリック相互作用論などの視点と強くからみあっている。シンボリック相互作用論では個人の主体性が出発点となる。主体としての個人がお互いの行為を幾層にもずらしながら解釈していく過程を重視して、さまざまな個人が織りなす行為の網の目のなかで社会の秩序や制度をとらえようとする。文化を内部から変換していく人間の力に目を留める本書の視点は、そのような視点を受け継いでいるといえるだろう。それゆえ、本書は単に様々な民族誌的事実の報告にとどまるものではなく、社会の拘束と個人の主体という社会理想の根本問題にせまろうとするものだ。その意味で社会学者にとっても必読の書といえる。

本論文集は、十三人の論者が、アメリカ、アジア、アフリカ、ヨーロッパなど各地の民族のもとで行ったフィールド調査にもとづいて書かれた論文集である。それぞれ独立した論文であり、その主要なテーマの性格によって、三部（第一部「文化的文脈におけるクリエイティブな個人」、第二部「経験による民族誌の創造」、第三部「集合的クリエイティビティ」）に分類されている。順に、いくつかの論文を取り上げながら、本書を概観していこう。

2 クリエイティブな個人たち

人類学の著作や民族誌において、その研究者が対象としている地域の一般の人々の日常的な生活が描かれていることは多い。それらの著作との違いは、この論文集では、ふつうの人々もそれぞれ固有の名前を持つ人たちとして描かれているという点である。これまでの民族誌のなかでは、特別な人物はのぞいて、ふつうの人々はその地域に住む一般化された人間像としてしばしば語られてきた。またその地域の習慣や社会制度を説明するために、それらの人々の日常生活が断片的に切り取られて描かれていた。この論文集は、それぞれクリエイティブな人々を変換の主体として取り上げ、その人々の生活史、個人史をとおし、それぞれの社会の習慣や文化を変えていった人々の行為をとらえるという分析視点を共有している。

第一部は、それぞれの民族の伝統的な表現様式の中で、クリエイティブな仕事をした人たち、スペインの農村の詩人や北米のプエブロインディアン人の陶芸家、インドのヒンドゥ教の導師などについての記録である。かれらに共通しているのは、それぞれの社会の伝統的な表現様式を活用しながら、それを自分たちの状況に合わせて、少しずつ工夫し変えていっている点である。

ヒンドゥ教徒の祖母をもち、ヒンドゥ教の民俗学の研究者であるキリン・ナラヤンは、あるヒンドゥ教の導師が集会でインド人や欧米人の信者に話をしたときの情景について書いている。彼は話をするときに、その場の状況や聴衆におうじて、物語の形を変えて語る。多くの流派が存在し、中心となる制度的構造がないヒンドゥ教では、導師と弟子との関係が集団の結び付きの中心となる。しかし、導師が不正なことを行う人物であった場合には、弟子の被害は大きく、そのためにまがいものの導師が存在する可能性への指摘が、古代の文献から現代の文学まで続いているという。ある宗教家は、その著作の中で、神の姿を見せるといって金を稼いでいた導師を非難し、その例え話として鼻を切り取れば神の姿が見えるといつて信者を集めていた男の話を教訓的に書いている。ところで、インフォーマントであるヒンドゥ教の導師は、集会で、この二つの話を、鼻を切られた男を前者の導師の弟子ということにして一つの伝説に仕立てて語ることを通して、導師－弟子の関係を際立たせている。さらに彼は、伝説の設定を現代的に作り直し、物語の中のまがいものの導師を自分自身に擬し、物語に登場する信者やあるいはその教えの批判者を、その集会にきている信者や聴衆に擬して語ることによって、聴衆を物語の中に引き込むのに成功している。またこのような彼の語り方は、聴衆にそれぞれ自分の状況を想起させ、例えば、過去に他のまがいものの導師にだまされたことがあると感じているものには信頼の大切さに関する話として、インドについての知識を得たがっている人には歴史の話としてというように、それぞれの状況に応じて解釈する余地を残している。(Kirin Narayan 'On Nose Cutters, Gurus, and Storytellers') 彼は教訓としてではなく伝統的な物語をその場の人々を取り込んで語ることによって、その物語の主題を聴衆それぞれが自分たち自身の問題を考える糸口にさせている。そして、彼が物語をするという行為そのものが、ヒンドゥ教における物語の形式の伝統を再創造することにつながっている。

特定の民族のクリエイティブな表現者について書いている著者たちの調査、分析の方法として共通しているのは、詩、陶器の人形や話といったその作品に加えて彼らの生活史、個人史を聞くことによって、彼らの行った変換や革新が彼ら自身にとってどのような意味を持ち、またその共同体にとってどのような意味を持つのかを考察する手がかりを得ていることである。バーバラ・A・バブコックは、プエブロインディアン人の女性のライフ・ヒ

ストーリーを聞くことを通して彼女の行った革新について論じている。その女性は、子育てが終わった後に四十五才で、伝統的に女性の仕事である陶芸を習い始めた。はじめのうちは彼女も普通に作られる水差しや壺や母親が子供を一人抱えている人形などを作っていたが、彼女の祖父が優れた語り部であったことにヒントを得て、一人の男の語り部の周りにたくさんの子供たちがしがみついている人形を作り出した。この人形が外部の収集家に認められ、似たような人形を作る女性たちが増えてきて、展覧会の誘いがあったときに、プエブロの男性たちによる部族会議では反対が出た。彼らの社会においては白人がやってくるまで、陶芸品を作るのは女性であっても、それを売買して金を扱うのは男性であったからである。ところで、この語り部人形を作り始めた女性にとって、語り部は男性でなければならなかった。家庭の中で物語をするのは、常に男性であったからであるという。彼女の行為は、象徴的な位相においては伝統を保持しつつ、共同体にとっての経済的な位相においては大きな変換をもたらした。また男の語り部人形を作ることで、それまで語られる存在であった女性としての彼女自身は、一つの新しい表現手段を手にいれていた。（Barbara A. Babcock ‘At Home, No Womens Are Storytellers: Ceramic Creativity and the Politics of Discourse in Cochiti Pueblo’）

ここで著者たちが分析しているのは、その対象とした人たちの作品や生活が客観的にあるいは他との比較によってどのように評価されるのかではなく、彼らが自分自身の行為や生活、人生をどう見ているのかである。自分の人生を自分で語ることとおして、彼らはその人生を再構成している。それらとおして、彼らの行為や活動が、彼ら自身の人生や、その時代のその地域の人々の身近かな生活にとって、クリエイティブな意味を持っているのを知ることができる。その記録をもとにして書かれたこれらの論文は、おそらく、文化の違いを越えた人間性というレベルにおいての共感を他文化の人にも呼び起こす力を持っているだろう。

3 民族誌の創造

クリエイティビティを人々の相互行為のなかにおいてみると、民族誌が作られていく過程をとおして調査者と現地の人々との関係が変わっていく可能性も考えられる。

第二部では、民族誌が作られ、読まれていく過程が、具体的な事例の中で考察されている。民族誌の創造には多くの人たちが関与している。まず研究者自身があり、そのインフォーマントになる人物がいる。さらに、調査地で研究者に関わるほかの人々、また研究者の本国での仲間や、論文で参照するほかの研究者やライバル。その民族誌の出版者。そ

して読者がいる。それぞれみな立場が違い、その民族誌にたいする関心の持ち方も違っている。そこには、さまざまな権力的な関係や友好的な関係が生じ、現実に影響を与えたり、受けたりするようになる。これらの中の幾つかの点について、具体的な事例を取り上げた論文に沿ってみていく。

まず民族誌の制作において、研究者とインフォーマントや他の現地の人たちとの関係は非常に重要な部分である。研究者が現地へ行くことによってその人々に引き起こす問題が、民族誌そのものを政治的、歴史的現実の中で考えようとするきっかけになった。北米のネバダ州に住む有能な治療者のところへ調査にいったドン・ハンドルマンは、彼の癒しの儀式の様子を見たいと思ったが、彼は自分はただの人間だといいはって、見せてもらうことができない。彼と話すうちに、著者はこれまでに少なくとも六人の研究者が彼を訪れていることにきづく。彼らは、学問的な類型化の中にその治療者を押し込めることによって、彼を困惑させてしまっていた。そうでなければ、実際には自分の技術を伝えられる弟子を求めている彼と共通の目標をもっていたかもしれないという。(Don Handelman 'The Absence of Others, the Presence of Texts')

このような研究者の性急な態度の背後には、研究者自身のキャリアの問題もある。研究者がキャリアを得ていくためには、研究者仲間のあいだでの権力関係の中でも戦っていかなくてはならない。

研究者と現地の人たちとの関係に戻ると、この両者のあいだの関係に齟齬をきたすのは、研究者個人の事情だけでなく、国家間での政治状況の変化が原因となることもある。イスラエルの人類学者であるスマダー・ラヴィによれば、彼女が当時イスラエルの占領下にあったベドウィンのオアシスにいたとき、国家間の和平協定によって、その場所はアラブ領に変わってしまった。突然国家という庇護者を失った彼女は、その和平協定の数日後に、一人のベドウィンの男性によって、砂漠の中の住む人もいないの井戸のそばに置き去りにされてしまう。その翌日彼女は、たまたま通りがかったベドウィンの女性に助けられた。彼女が助かったのは、ベドウィンふうの挨拶の仕方と礼儀を身に着けていて、それがそのベドウィンの女性に受け入れられたからである。ベドウィンには、他の部族からきた人を歓待する伝統があるという。しかし外国からの旅行者の急激な増加と、ベドウィンの人たちが自身の生活の西洋化によって、伝統的な客人の歓待は困難になりつつあった。著者であるこのイスラエルの人類学者にベドウィンの習慣を教えた家族たちが、彼らのアイデンティティの拠り所の一つであるこの歓待の伝統の存続を危ぶんでいたとき、彼女は自分が助けられたときの経験を皆に語った。その話にベドウィンの家族たちは納得してゆき、彼女は歓待の伝統への危惧を打ち消し得たと感じている。(Smadar Lavie, 'The One Who Writes

Us ” : Political Allegory and the Experience of Occupation among the Mzeina Bedouin’) ここでの研究者と現地の人たちとの関係は、ドラマティックである。彼女は、自分のベドウィンの人々への思いをまったく変容させてしまうような経験をしている。しかし、その経験をとおして、彼女は、お世話になっていた人たちに新しい役割を果たせるようになっているのである。この民族誌の登場人物としては、現地の人々に加えて、研究者自身が不可欠なものとなっている。研究者個人と現地の人々諸個人の行為をそれぞれ書き留めることで、彼女の現地での立場がはっきりと分かる。またふつうの民族誌にはあまり現れないと思われる、研究者自身と国家との関係も明瞭に現れている。

民族誌を政治的、歴史的現実の中において考えてみると、民族誌が作られる過程だけでなく、それが受け取られる過程もかならずある。ジョゼ・E・ライモンは、今世紀の初めにアングロアメリカ人に抵抗したあるメキシコ系移民を取り上げたメキシコ民謡の研究書が1960年代のチカーノ運動の担い手に抵抗のモデルを伝える働きをした様子を記している。

(José E.Limón, ‘The Return of the Mexican Ballad: Américo Paredes and His Anthropological Text as Persuasive Political Performances’) これは、民族誌に限らずあらゆる本と読者との関係にいえることだが、ある民族誌が、その読者の人生観、生き方を変容させるきっかけになったとすれば、その民族誌はクリエイティブな読まれかたをしたのだといえよう。

本論文集の第二部のコンセプトは、民族誌を、人間の主体的活動の産物として見る、ということだとおもう。それは、民族誌のテーマそのものにくわえて、それがどのように企画され、調査が行われ、執筆され、販売され、読まれたかを考えることである。どんな民族誌も、まったく客観的な立場から書かれているのではない。いろんな人間がそれぞれの立場からそれに関わっている。それ自体は悪いことではない。むしろ、それぞれの立場や関心のぶつかりあいのなかに、新しい発想が生み出される可能性があるのかも知れない。調査者とインフォーマントとの関係には、倫理的な問題も存在する。このことも含めて、民族誌に関わる人々の関心をそれぞれの人の現実の中に置き直し、民族誌を一つのメディアとしてどのように作られ、受け取られていくのかをみていくのは意味のあることと思われる。

民族誌はそれに関わる人々の相互行為の産物である。それが生み出され、受け取られていく過程の中にこそ、それに関与する人々の社会関係を作り直し、再創造していく可能性がある。

4 集合的なクリエイティビティ

人々の習慣の形を変えていくということはひとりでできることではない。それは、上述のように、さまざまな人々の社会的な関係を問い直し、その相互作用の形、協働の仕方を変えていくことである。

第三部では、クリエイティブな行為が生み出される場、環境についての考察がされている。社会生活をおくるなかで、なんらかの共通の問題が生じたとき、人々は協力して、それを解決しようとするだろう。それまでの習慣を変えて問題に立ち向かうための新しい態勢を作ろうとする。このような場では、変換は一個人によって成されるのではなく、人々の協力によって成される。このような行為を、集合的クリエイティビティと呼べよう。ここでは、このような集合的なクリエイティビティが生み出される過程について分析された論文を取り上げてみる。

ニューギニアのカルリの人々にとって、降霊会は、このような集合的なクリエイティビティを生み出す場となっている。調査者を含めて、この降霊会に参加する人々が降霊会における儀礼にどれほど魅了されるのかということを理解するためには、具体的な出来事の詳細な記述や、儀礼のその文化的文脈における意味の分析だけでなく、そのパフォーマンスの行われ方そのものをみる必要があるという。カルリの人々にとって、世界は人間の住む目に見える側と精霊の住む目に見えない側とに分かれるが、その二つの世界を繋ぐのが降霊会において媒介者が演じる精霊との対話である。彼らは、病人の治療方法や逃げ出した豚の居場所を捜し出すといった精霊が引き起こしたとされる日常生活の中での問題を降霊会において解決しようとする。彼らは、降霊会の作り出す緊迫感のなかで期待と不安を共有しながら、媒介者が演じる精霊の曖昧な言葉を共同して解明しようとする。彼らがそれぞれの知識や体験を駆使して精霊の言葉の意味を彼ら自身で明らかにし得たと感じたとき、問題はとりあえず解決され、パフォーマンスは終了する。降霊会自体や、目に見えない精霊の世界のリアリティが生じるかどうかは、対話という集合的なパフォーマンスが人々に対してどれほど説得的に行われたかによって決まる。(Edward L. Schieffelin, 'Performance and the Cultural Construction of Reality: A New Guinea Example')

人々がその状況に応じて相互作用の形や社会的な関係を問い直しつつ、新たな状況に応じた関係を設定し直し、それまでの習慣を変えるような新たな協働の形を作っていくことは簡単ではない。上記の論文の中で描かれているのは、人々が共有された認識を得る過程の分析である。ここから、実際に新しい状況によりふさわしい協働の行為を行っていきける

かどうかは、まだ分からないと思う。しかし、集合的なクリエイティビティを成立させるのは、生活のなかの偶発事に対応する力をもった、日常の柔軟な社会関係そのものであろう。

5 おわりに

本書の意義は、クリエイティビティを人々の行動の中においたことにある。このような視点は、人類学の研究者たちが調査の対象地に出掛け、その人々の生活を共有するフィールドワークの経験を通じて得られたものではないだろうか。私たちはその場所です以前から行われてきた習慣にのっとることでコミュニケーションを行い得る。しかし長期間行われてきた習慣は、その形での存続により重点が置かれていくことによって、無意識のうちに私たちにとって抑圧的に働く規範となっていくことがある。本書の視点は、日々の生活の中の行為を通して、この習慣の規範的な側面を私たちの状況により都合のよい形でのコミュニケイティブな習慣へと自在に変換していく可能性を重視しようとする。それは、ミクロな日常生活の中にマクロな社会変化に対するヘゲモニーの可能性をみようとする、日常実践の主体構築の思想を提唱しているものである。このことは、研究者と調査の対象となった地域の人々との関係も例外ではない。相互のものの見方の違いや、そのおかれた状況、力の違いを認識しつつ、共有する経験をとおして新しい文化を「クリエイト」していこうというのが本論文集をとおしてのメッセージであると思われる。

(さかべ しょうこ・修士課程)